



慶應義塾大学ビジネス・スクール

聖路加国際病院

5

— 地下鉄サリン事件への対応 —

1995年3月20日、月曜日午前8時。聖路加国際病院、救急センターの森屋医師はいつになく爽やかな気分で朝を迎えていた。救急センターの窓からは穏やかな日差しが差し込んでいた。桜のつぼみが青い空に映えていた。前夜は救急センターからの呼出し電話で起こされることもなく自宅で熟睡することができた。慢性睡眠不足の日々から久しぶりに開放されて心も体もリフレッシュした気持ちがしていた。よしやるぞ、と大きく伸びをして前日に収容された患者のカルテをチェックし始めた。

10

午前8時16分、東京消防庁からの直通電話がなった。「茅場町駅で火災・爆発事故。被害者収容の準備をお願いします。」と消防庁の職員からの連絡をうけた看護婦が、内容を電話口で復唱しながら近くにいた森屋医師の顔を見た。森屋医師は受話器をとった看護婦に向かって、「5、6人は大丈夫ですって言っていいよ」と声をかけた。

15

この時のことを森屋医師は振り返ってこう語っている。

20

「通常ですと、救急処置室が2つしかないの、3人ぐらいというのが普通です。でも、その日は妙に気分がよかったので、大判振る舞いというか、『何人でも来い、治療するぞ』という気持ちになっていました。」

電話をうけて、救急センターの看護婦や医師たちは火災・爆発事故の外傷患者を想定して、ガーゼや酸素の用意などを黙々とはじめた。いつもの救急センターの日常が始まった。この時点で誰もその日が歴史に残る大変な一日になることを想像したものはいなかった。

25

本ケースはクラス討議の資料とするために、慶應義塾大学ビジネス・スクール教授高木晴夫の指導のもと、高千穂大学専任講師高田朝子が聖路加国際病院から全面的協力を得て作成した。尚、個人名役職名に関する若干の事実は擬装されている。(2002年)

30

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール(〒223-8526 神奈川県横浜市港北区日吉4丁目1番1号、電話045-564-2444、e-mail: case@kbs.keio.ac.jp)。また、注文は<http://www.kbs.keio.ac.jp/>へ。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法(電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない)による伝送も、これを禁ずる。